

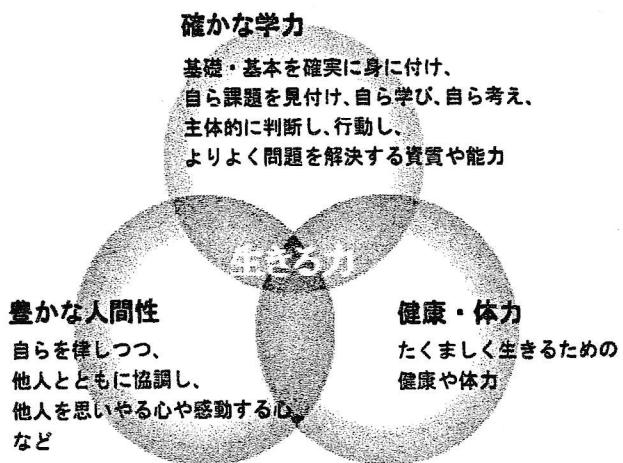
子どもたちの「生きる力」を育みます

平成14年度から実施されてきた学習指導要領では、「生きる力」を育むことを理念としてきました。

新しい学習指導要領では、子どもたちの「生きる力」をより一層育むことを目指します。

学習指導要領の理念－「生きる力」

学習指導要領の理念は「生きる力」、
それは、知・徳・体のバランスのとれた力のことです



新しい学習指導要領改訂のポイント

○これからの「知識基盤社会」の時代において「生きる力」を育むという理念はますます重要だと考えられています

○教育基本法改正等により教育の理念が明確になるとともに、学校教育法改正により学力の重要な要素が規定されました

今回の改訂においては、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、「生きる力」を育成

学力の重要な3つの要素を育成します

①基礎的な知識・技能をしっかりと身に付けさせます

②知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育みます

③学習に取り組む意欲を養います

「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成との両方が大切。
それぞれの力をバランスよくのはしていきます。

Q 「学習指導要領」とはどうなものですか。

A 全国どの地域で教育を受けても、一定の水準の教育を受けられるようになります。文部科学省では、「学習指導要領」といいます。「学習指導要領」では、小学校、中学校、内容を定めています。また、これとは別に、教科等の目標や大まかな教育規則で、それぞれの教科等の年間の標準授業時数等が定められています。各学校では、この「学習指導要領」や年間の標準授業時数等を踏まえ、地域や学校の実態に応じて、教育課程(カリキュラム)を編成しています。

[一覧へ戻る](#)

Q これまでの学習指導要領の変遷について教えてください。

- A 「学習指導要領」は、戦後すぐに試案として作られましたが、現在のような大臣告示の形で定められたのは昭和33年のことであり、それ以来、ほぼ10年毎に改訂されてきました。それらの改訂は、以下のとおりです。
- 昭和33～35年改訂 教育課程の基準としての性格の明確化、(道徳の時間の新設、系統的な学習を重視、基礎学力の充実、科学技術教育の向上等)
 - 昭和43～45年改訂 教育内容の一層の向上(「教育内容の現代化」)(時代の進展に対応した教育内容の導入(算数における集合の導入等))
 - 昭和52～53年改訂 ゆとりのある充実した学校生活の実現(各教科等の目標・内容を中心的事項にしほる)
 - 平成元年改訂 社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成(生活科の新設、道徳教育の充実等)
 - 平成10～11年改訂 基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成(教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設等)



教育課程・方法論

コンピテンシーを育てる授業デザイン

松尾 知明

学文社

21世紀の変化の激しい社会を生き抜く力(コンピテンシー)とは、どのようなものであろうか。このようなコンピテンシーを育成するには、いかに授業をデザインしていくべきなのだろうか。

グローバル化が進み、知識基礎社会から来る中で、コンピテンシーを育成する授業デザインの革新が求められている。それは、「何を知っているか」だけではなく「何ができるか」を育む教育への転換である。本書は、知識の活用をめざす新しい教育のあり方が求められる中で、人間の全般的な能力(知識・スキル・態度)としてのコンピテンシーの育成に焦点をあて、これから授業デザインについてわかりやすく紹介することを目的としている。

さて、激しく変化する現代社会においては、さまざまな課題や新たな問題が恒常に立ち現れ、社会的にも個人的にも私たちはそれらへの対応や問題解決に迫られている。このようなまぐらしく移り変わる社会では、自立した個人が自ら問いを立て、限られた情報をもとに、他者と協力しながら直面する諸課題を解決していくことが求められる。

こうした現代社会を生き抜く力を育むためには、教科等の知識の習得をめざす従来型の教育では限界がある。知識の獲得だけではなくそれを活用して問題解決のできるコンピテンシーの育成を可能にする教育をデザインしていくことが大きな課題になっているのである。

このような背景から、OECDのキー・コンピテンシーや21世紀型スキルなどを定義する動きを背景に、諸外国では、コンピテンシーの育成をめざした教育課程や教育システムを構築する改革が世界的な潮流となっている(詳細については、第5章を参照)。

一方、日本では、「生きる力」などの資質・教育目標が掲げられるようには

なったもののその育成には課題が残されている。「生きる力」を構成する資質・能力が明確に提示されていなかったり、教科内容を記憶する授業づくりがいままで主流であったりしており、21世紀の社会を生き抜く力の育成に焦点化された教育システムへの改革が急がれている。そのため、文部科学省においても、「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に關する検討会」で議論が重ねられ、中央教育審議会において引き継ぎ検討が進められていく予定である。次期学習指導要領の中心的な課題として、資質・能力(コンピテンシー)の育成が焦点となっているのである。

このような近年の動きを踏まえ、本書では、コンピテンシーを育てる授業デザインの考え方や進め方について考えたい。とくに、教師を志す皆さんを対象として、コンピテンシーと教育改革をめぐる動向、及び、カリキュラムの基本的な概念などをわかりやすく整理して概観するとともに、「総合的な学習の時間」を事例に、コンピテンシーを育てる単元指導計画をデザインしていく具体的な手順を検討したい。カリキュラムデザイナーとしての専門家をめざす皆さんにとって、コンピテンシーを育成する授業デザインの革新に向けた一つの指針を提供できたら幸いである。

第1章

コンピテンシーを育成する

授業の革新に向けて

本章のポイント

- 変化の激しい21世紀の社会を生き抜き、新しい日本社会を再構築していくために、「自立・協働・創造」していく生涯学習者であり責任ある市民としての日本人の育成が課題になっている。
- コンピテンシーに基づく教育改革の国際的なトレンドを踏まえ、たとえば、「基礎力」「思考力」「実践力」で構成される「21世紀型能力」などといった資質・能力目標のモデルが検討されている。
- 総合的な学習の時間では、すでに資質・能力目標が掲げられており、その育成に向けた学校レベルでのカリキュラムデザインの手立てが示されている。

ピンチをチャンスに変える転機とことができるだろうか。東日本大震災の危機的状況は、私たちの住む日本社会を根底から振り返る機会となった。これを契機に、日本の教育のあり方を抜本的に変革していくことが期待されていると思われる。21世紀の社会を生き抜くコンピテンシーを育むことのできる教育への本格的な改革に着手できるかどうかが直近の課題となっているのである。ここで、コンピテンシーとは、知識だけではなく、スキル、さらに態度を含んだ人間の全般的な能力をいう。

本章では、日本社会の直面する課題を踏まえ、「何を知っているか」だけでなく、「何ができるのか」を可能にするコンピテンシーを育成する授業デザ

インへの転換が求められる背景や方向性について検討したい。

1. 日本社会の直面する課題

(1) 日本再生のシナリオに向けて

地震、津波、原発事故が重なった東日本大震災の経験は、運命共同体としての日本人という意識を覚醒させるとともに、人と人との絆の重要性を再認識させる契機となつた。急激な少子高齢化等による社会の活力のなさ、閉塞感の広がり、内向き指向の若者の増加が指摘される今日、この震災を契機に、ものづくり大国として発展し、強い絆で結ばれた日本という原点に立ち返り、日本人の新たな未来をつくっていくための日本再生のシナリオが求められているのではないだろうか。

天然資源に恵まれない日本はこれまで、原材料を輸入し、それから新しいものを生み出す繋いだいノベーションを通して大きな発展を遂げてきた。その日本経済は現在きびしい国際競争にさらされており、課題先進国の日本として、知識を創造していくノベーション文化の再生に向けた新たな飛躍が求められている。また、環境、資源、エネルギー、貧困、人権の問題など深刻な地球規模の問題が山積しており、これら問題を解決し持続可能な社会の構築が急がれている。グローバルでポーラーな社会が到来する中で、広く柔軟な視野をもち文化の異なる人々と協働して創造的に問題解決していくグローバル人材の育成が課題となっている。

一方で、人間関係を大切にしながら、集団で協力して課題を解決することが伝統的に日本文化の特徴であった。それが、人口減少、少子高齢化、過疎過密など社会が劇的に変容する中で、人間関係の希薄化が進み、生活の基盤である地域が脆弱化している状況に直面している。震災で地域社会の評の強さが再確認されたが、私たちの生きるコミュニティを見つめ直し活性化していくためにも、地域の文化的な活動や自治的な実践、NPOやボランティア団体による市

民活動などに積極的に参画して、新たなコミュニティの共同構築を担っていく責任ある市民としてのローカルな人材(地域社会の担い手)の育成が課題となつている。

では、21世紀の世の中を生き抜き、新しい日本社会を創造する市民を育成していくために、日本再生のシナリオとして、どのような教育が求められているのだろうか。

(2) 要検討する21世紀の日本社会

- ① グローバル化に伴い、社会の多文化化が進み、異なる文化との接觸を週年生間接触
- ② 地球規模化が進行し、地球の縮小化が進行する一方で、21世紀の日本社会はいくつかの大規模な変化に直面している。
- ③ 地域密着社会の実践
- ④ デジタル社会への接觸

このような背景から日本においても、文部科学省に「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方にに関する検討会」が設置され、育成すべき資質・能力、その育成のための教育目標・内容、評価のあり方が議論され、中央教育審議会において引き継ぎ議論が深められていく予定である。次期学習指導要領の中心的な課題として、資質・能力の育成が焦点となっているといえる。

国立教育政策研究所では、学習指導要領の理念である「生きる力」を実効的に獲得することをめざし、「21世紀型能力」を構想している。これは、生きる力を構成する知・意・体の三要素から、教科領域横断的に育成が求められる資質・能力を取り出しあうえで、それらを「基礎力」「思考力」「実践力」の三層の構造として整理している。思考力を中核とし、それを支える基礎力と、思考力の使い方を方向づける実践力という三層構造をもつて、実践力が生きる力へと繋がることを狙ったものである。

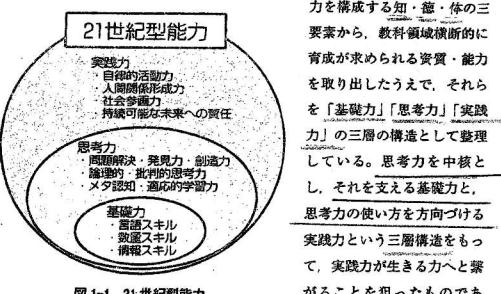


図1-1 21世紀型能力

(出典) 国立教育政策研究所「教育政策の構成に関する基礎的研究報告書5 社会の変化に応する資質や能力を育成する教育課程構成の基本原理」、2013年、26頁。

具体的には、「基礎力」

は、言語・数量・情報・情報などを道具として目的に応じて使いこなす力、「思考力」は、一人ひとりが自ら学び判断し自分の考えをもって、他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、さらに次の問い合わせにつける力、「実践力」は、日常生活や社会、環境の中に問題を見つけ出し、自分の知識を活用して、自分やコミュニティ、社会にとって価値のある解を導くことができる力、さらには解を社会に発信し協調的に吟味することを通して他者や社会の重要性を味わう力と定義している。

表1-1 21世紀型能力の構成要素

	定義	下位要素
基礎力	言語、数量、情報(ICT)を道具として、目的に応じて使いこなす力	言語スキル 数量スキル 情報スキル
思考力	一人ひとりが自ら学び自分の考えをもって、他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出す力、さらに次の問い合わせを見つける力	問題解決・発見力・創造力、論理的・批判的思考力、メタ認知・適応的学習力
実践力	日常生活や社会、環境の中に問題を見つけ出し、知識を活用して、自分や仲間・地域にとって価値のある解を導くことができる力、さらには解を社会に発信し協調的に吟味することを通して他者の重要性を味わう力と定義している	自律的活動力 人間関係形成力 社会参画力 持続可能な未来への責任

よろづや
・コンピテンシーが必要な時代になつたのかを考えよう。
なぜ、コンピテンシーが必要な時代になつたのかについて考えよう。
・コンピテンシーの育成をめざして、これからどのような教育のあり方
が求められるのかについて考えよう。

3. 「コンピテンシーの定義と選択(DeSeCo)」プロジェクト

(1) キー・コンピテンシーとは

リテラシー概念の拡張とともに、コンピテンシーという用語が新たに登場することになった。コンピテンシーは、OECDの「コンピテンシーの定義と選択(Definition and Selection of Competencies: DeSeCo)」プロジェクトにおいて提案された概念である(ライエン&サルガニク 2006)。

このプロジェクトは、1990年の「万人のための教育(EFA)世界会議」で決議された「万人のための教育宣言」の理念に従い、1997年から2003年にかけて実施された。デセコ(DeSeCo)プロジェクトは、グローバリゼーションの進む社会で、国際的に共通するカギとなる資質・能力を定義し、その評価と指標の枠組みを開発することを目的としたものだった。学問諸領域の専門家や各国の政策担当者の協議を通して、現代社会において最も重要なとされる資質・能力の検討が行われ、キー・コンピテンシーが概念化されたのである。

デセコ(DeSeCo)プロジェクトでは、コンピテンシーとは、人が「特定の状況の中で(技能や態度を含む)心理社会的な資源を引き出し、動員して、より複雑な需要に応じる能力」と定義されている。それは、①個人の成功にとっても、社会の発展にとっても価値をもつもので、②さまざまな状況において、複雑な要求や課題に応えるために活用でき、また、③すべての人ににとって重要なものである。キー・コンピテンシーは、そうしたコンピテンシーのなかでも中核となる能力ということになる。

キー・コンピテンシーは、図1-1-1に示すように、①「相互作用的に道具を用いる力」、②「社会的に異質な集団で交流する力」、③「自律的に活動する力」、という三つのコンピテンシーから構成されている。①相互作用的に道具を用いる力には、下位の項目として、A.言語、シンボル、テクストを相互作用している

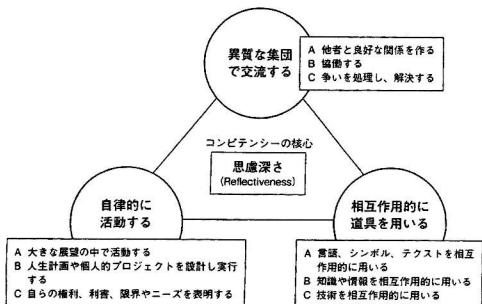


図1-1-1 キー・コンピテンシーの構造
出典：立田 2012、42頁をもとに作成。

能力、B. 知識や情報を相互作用的に用いる能力、C. 技術を相互作用的に用いる能力がある。②社会的に異質な集団で交流する力には、A. 他者と良好な関係を作る能力、B. 協働する能力、C. 爭いを処理し、解決する能力がある。また、③自律的に活動する力には、A. 大きな展望のなかで活動する能力、B. 人生計画や個人のプロジェクトを設計し実行する能力、C. 自らの権利、利害、限界やニーズを表明する能力がある。

さらに、キー・コンピテンシーの中核となるものとして「思慮深さ(Reflectiveness)」が位置づけられている。それは、社会から一定の距離をとり、異なる視点を踏まえながら、多面的な判断を行うとともに、自分の行為に責任をもつ思慮深い思考と行為をさしている。

以上のように、キー・コンピテンシーは、ある具体的な状況の下で、文脈に応じて活用して、思慮深く思考しながら行為し、複雑なニーズや課題に応える能力といえる。

デセコ(DeSeCo)プロジェクトの意義について、シュライヒャー(A. Schleicher)は、「デセコの総合的な枠組みは、一層大きな概念的文脈の中に各調査を位置

コンピテンシーの三つのカテゴリー

コンピテンシーは、

- 全般的な人生の成功と正常に機能する社会という点から、個人および社会のレベルで高い価値をもつ結果に貢献する。
- 幅広い文脈において、重要な複雑な要求や課題に答えるために有用である。
- すべての個人にとって重要である。
 - 相互作用的に道具を用いる能力
 - 知識や情報を相互作用的に用いる能力
 - 技術を相互作用的に用いる能力
- 異なる集団で交流する。
 - 他人と良好な関係を作る能力
 - 協働する能力
 - 争いを処理し、解決する能力
- 自律的に活動する。
 - 大きな展望のなかで活動する能力
 - 人生計画や個人のプロジェクトを設計し実行する能力
 - 自らの権利、利害、限界やニーズを表明する能力

づけ、現在の調査の限界を知る方法を提供してくれる。キー・コンピテンシーの三つのカテゴリーは、より広い範囲のコンピテンシーを獲得する方向に向けた将来の調査方法を体系的に拡張する道標となる(ライエン&サルガニク 2006、191頁)と述べている。すなわち、情報処理としてのリテラシーの概念をもとにした現在の国際調査で明らかにできているのは、デセコのキー・コンピテンシーのほんの一部に過ぎない。とくに、社会的に異質な集団で交流する力や自律的に活動する力については、ほとんど明らかにされていない。キー・コンピテンシーの枠組みは、未知の能力の解明を視野に、これから国際調査を方向づけていくコンパス(羅針盤)になるのである。

4. キー・コンピテンシーの展開

(1) 國際的な動向

キー・コンピテンシーの概念の一部は、OECDの国際学力調査であるPISA(Programme for International Student Assessment)の調査内容の枠組みに生かされている。PISAでは、「相互作用的に道具を用いる力」の一部を評価可能のように、読解リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーとして具体化して表1-1-2にあるような定義の下に、問題の設計に活用されている。PISAは、国際的な学力状況を対象的に示す指標として、諸外国の教育政策にきわめて大きな影響を与えるようになっている。さらに、PISA2015ではICTを活用した協調的問題解決の問題が導入されることになっている。

表1-1-2 PISAの定義

読解力 (読解リテラシー)	自らの目的を達成し、知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、活用し、深く考える能力
数学的リテラシー	数学が世界で果たす役割を知り理解するとともに、社会に対して建設的で闇心を寄せる思慮深い市民として、自らの生活の必要に見合った方法として数学を活用し、応用し、より根拠のある判断を行なう能力
科学的リテラシー	自然の世界及び人間活動を通してその世界に加えられる変化についての理解と意志決定を助けるために、科学的知識を活用し、科学的な疑問を明らかにし、論拠に基づく結論を導く能力

出典：ライエン&サルガニク 2006、219頁。

(2) 21世紀型スキルとは

では、21世紀型スキルとは、具体的にはどのような概念なのだろうか。21世紀型学習の枠組みは、図1-2-2のように、大きくは虹の部分とブルの部分から構成される。虹の部分は、コア教科と学際的テーマ及び三つのコア・スキル(①学習とイノベーションスキル、②情報、メディア、テクノロジースキル、③生活とキャリアスキル)がある。ブルの部分は、学習支援システム(スタンダードと評価、カリキュラムと指導法)がある(Trilling & Fadel 2009)。

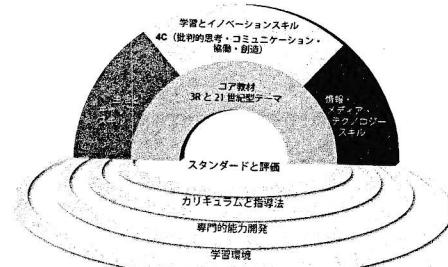


図1-2-2 21世紀型スキルの枠組み
出典：Trilling & Fadel 2009, p.119

①コア教科と学際的テーマ

21世紀型スキルは、コアの教科を重視している。コアとなる教科には、英語・読み・書き技術、外語、芸術、数学、経済、科学、地理、歴史、政治と公民が設定されている。21世紀の教育は、教科のしっかりと知識の基礎の上に立たなければならぬとされる。ポイントは、子どもがたくさんのがんばることではなく、知識を獲得するプロセスに参加し、深い理解に至らせることにある。

これらのコア教科に加え、学際的テーマが設けられている。それらは、グローバル意識、金融、経済、ビジネスと起業リテラシー、公民リテラシー、健康リテラシーである。今日的な課題を解決するためには、私たちは複数の領域からの知識を総合的に活用する必要がある。学際的な課題は知識の領域の重要な関係を捉え、別々の領域をよりうまく統合させるものとなる。教科の知識と実生活や実社会の間の関係を関連づけ、個人、市民、職業生活で効果的であるための柔軟な思考の育成をめざすのである。

②三つのコア・スキルとサポートシステム

コア・スキルには、表1-2-1に示すように、①学習とイノベーションスキル、

表1-2-1 21世紀型スキルの構成要素(三つのコア・スキル)

①学習とイノベーションスキル	<ul style="list-style-type: none"> 批判的思考と問題解決 情報リテラシーと協働 創造とイノベーション
②情報・メディア・テクノロジースキル	<ul style="list-style-type: none"> 情報リテラシーと協働 創造とイノベーション 創造的思考 創造的活動 イノベーション実施
③生活とキャリアスキル	<ul style="list-style-type: none"> 柔軟性と適応性 進取と自己方向づけスキル 社会/文化横断的スキル 生涯/アカウンタビリティスキル リーダーシップと責任スキル

出典：Trilling & Fadel 2009, pp.45-86

②情報・メディア・テクノロジースキル、③生活とキャリアスキルの三つがある。